

# ガンジーの思想について

豊 田 千代子

## はじめに

私達は誰もが幸福でより良い人生を送りたいと願っている。生命をもつ存在として、人間らしく生きることを望んでいるのである。

しかしながら、現代の日本社会では、それは容易ではない。生産労働一つを取り上げて見ても、大量生産・大量消費が常態化する中、利潤を生み続けるために効率重視の労働が強要されている。そこでは、本来の労働の喜びは感じにくい。

私達は、より良い人生を送るために、人間らしく生きるために、どのような社会を築いていったらよいのだろうか。

本稿では、インド独立の父であるガンジー（Mohandas Karamchand Gandhi 1869 - 1948）の思想の中に、こうした問いを解くためのヒントを探ってみた。彼の思想はすべての生命を生かすことを中核としているため、解答への示唆を与えてくれると考えられるからである。

ガンジーの著書は自伝を含め多数出版されているが、ここでは、『ガンジー・自立の思想』を取り上げたい<sup>(1)</sup>。

## 1. 自立のための手仕事—インド独立の象徴としての手仕事

ガンジーは、イギリス帝国の植民地であったインドの独立を目指し運動を展開した。それは、インド人として人間らしく生きる暮らしを取り戻したいと考えたからである。彼は、非暴力を掲げ、糸紡ぎという手仕事を軸に運動を進めたのである。

### (1) スワラージ (自治)

ガンジーは、貧困を抱えたインド人が自分達の暮らしを自分達で創り出していくことが独立に繋がると考えていた。スワラージ (自治) は、彼が目指すものである。

ガンジーは、機械化に代表される西洋の近代文明を批判している。そして、この近代文明をインド人が自ら進んで受け入れたことが、インドの貧困やイギリス帝国への奴隷状態を生んだ原因とも考えている。

ガンジーによれば、「近代文明が病気であり、イギリスがそれに冒されている」<sup>(2)</sup>。そして、そうしたイギリスにインドが占領された理由について、ガンジーは、「イギリス人がインドを占領したではありません。私たちがインドを彼らに差し出したのです。彼らが力づくでインドを占拠しているのではありません。私たちがイギリス人を引き止めているのです」<sup>(3)</sup>と述べている。元来イギリス人は貿易のためにインドに来たのだが、私利私欲のために東インド会社の幹部に手を貸し隷属状態を生み出したのは他ならぬインド人だったというのである<sup>(4)</sup>。

ガンジーはこのように、問題は、イギリスの文明を受け入れた自分たちにあると捉えているのである。

また、機械について、ガンジーは「近代文明を象徴するものであり、大いなる罪悪を表すもの」<sup>(5)</sup>と考えている。機械による少人数での大量生産は失業を生み、インドを貧困にしているとして機械の弊害を厳しく指摘するのである。

とはいえ、ガンジーは、機械そのものではなく「盲目的な機械崇拜」に反

対しているとも述べている。ガンジーは、機械による「省力化」に伴う失業・貧困を指摘する一方で、機械による労働の軽減を「すべての人のために」行いたいし、「すべての人の手に」富を握らせたいと思っている。しかし、現状では、「機械は少数の人間が大多数の人を踏みつけにして栄えるのを助けているに過ぎ」ないとし、このような機械の濫用に反対し、機械の使用を制限しようとしたのである<sup>(6)</sup>。

また、ガンジーは、工業化についても否定的に述べている。「工業化は人類にとって禍根を残すもの」となりうると見るからである。なぜなら、ガンジーによれば、「工業化の成否は、他国を犠牲にできるかどうかで決まる」のであり、インドの工業化は他の民族や国を搾取することを意味するからである。そして、彼は、「工業主義へと国の方向を切り換えることは、必ず災いを招くと断言した<sup>(7)</sup>。

ガンジーは、以上のように機械化・工業化（近代文明）を、他者の排除や搾取という点から批判し、インドの貧困の克服を、手仕事を基盤とする非暴力的なスワラージ（自治）に求めたのであった。

## （2）アヒンサー（不殺生・非暴力）

ガンジーは、スワラージ（自治）をアヒンサー（不殺生・非暴力）によって築こうとした。

アヒンサーは、ガンジーにとってすべての基本である。インドの独立もアヒンサーによって達成された。

アヒンサーとは、基本的には、暴力を用いないという意味である。武器を用いない、肉体的制裁を加えないなどである。ガンジーにおいて、それはまた広義でも用いられている。搾取や抑圧をしないという意味である。さらに、このことと関連して、すべてを排除しないという意味も含んでいるように思われる。

ガンジーは、「村を搾取することはそれ自体が組織化した暴力です。もし我々がアヒンサー（不殺生・非暴力）の上にスワラージを打ち立てたいので

あれば、村がその自治にふさわしいものとなる必要があります」<sup>(8)</sup>と述べるのである。

また、ガンジーは同様に、すべての人々のための自治を目指している。彼は、インドの庶民、とりわけ貧困で飢えている人々や不可触民と言われる最下層の人々など社会の中で最も弱い立場にある人々の存在を常に意識している。ガンジーにおいては、これらすべての人々を排除しないということもまたアヒンサーと言えよう<sup>(9)</sup>。

ガンジーは、このようなアヒンサーの精神・生き方によって、スワラージを築こうとしたのである。

### (3) チャルカ（手紡ぎ車）とカディー（手紡ぎ・手織りの綿布）

アヒンサー（不殺生・非暴力）によるスワラージ（自治）を確立するために、ガンジーは、チャルカ（手紡ぎ車）で綿糸を紡ぎ、その糸で手織りの布を作ることを考案した。この手紡ぎ・手織りの綿布はカディーと呼ばれる。

「チャルカはアヒンサーに基づく自立経済のシンボル」<sup>(10)</sup>である。そして、カディーは「アヒンサーの生き方を象徴するもの」<sup>(11)</sup>である。

ガンジーは、「大多数の人々が関わることのできる産業」<sup>(12)</sup>として糸紡ぎに着目した。貧困者や飢饉の続く村で労働を放棄して餓死を待つ人々などが携われるものとしてである。そのチャルカの「メッセージには、質素、人類への奉仕、加害者にならずに生きること、金持ちと貧者・資本家と労働者・領主と小作人が揺るぎない絆で結ばれることなど」<sup>(13)</sup>が込められている。それ故、「チャルカは一回転するごとに、平和、親善、愛を紡いでいる」<sup>(14)</sup>のである。ガンジーは、かつてはインドの家庭で使われていたチャルカの復活を提唱し、それをアヒンサー及びアヒンサーに基づくスワラージ（自治）の象徴としたのであった。

またガンジーは、カディーの意義を、工場製の布と対比させて説いた。「カディーは、この国のすべての人が収入の道を得、平等になるための第一歩」<sup>(15)</sup>とガンジーは言う。「カディーがすべての人に仕事を提供するのに対して、工

場の布は小人数の者に仕事を提供し、多くの正当な労働を排除します。カディーが大衆のためにあるのに対し、工場の布は富裕階級を富ませるためにあります。カディーは労働に奉仕し、工場の布は労働を搾取します」<sup>(16)</sup>と述べるのである。

また、カディーの経済法則について、それが一般的なものと本質的に異なるとガンジーは述べている。カディーの独自性は、「作ったその場所で使用すべき」であり、かつ「なるべく糸を紡ぎ布を織った本人が使用すべき」点にあると言う。そして、「このような使い方をすることで、カディーの需要は自動的に保証され」と捉えるのである<sup>(17)</sup>。

さらに、このようなカディーは、スワデシ（国産品愛用）精神によって支えられるべきものとガンジーは考えている。

以上のように、ガンジーは、貧困の克服のために、アヒンサーに基づく自治の構築を糸紡ぎ・機織りという手仕事によって進めようとしたのであった。

なお、ガンジーは、カディーの取り組みを進める中で、取り組んできた方法では、カディーの普及と村の再興の両方において十分でないことに気がついた。「カディーの取り組みはほんの少数の人に限られたものでしたし、カディーだけを用いている人であっても、それ以外は何もする必要がないという思い込みを抱いているようでした」<sup>(18)</sup>と述べている。そのため、ガンジーは、自治に向けてカディーの運動の進め方を考え直すことにしたのである。

## 2. ガンジー思想の現代的意味

1. で取り上げたガンジーの思想は、当時のインド社会に対してのみ有効なものではない。機械化を中心とする近代文明を受け入れているすべての国々・社会への警告として、今日でもその新鮮さを失っていない。本稿の初めに掲げた問いと関わる重要な示唆も、そこからいくつか引き出すことができるだろう。

### (1) すべてを排除しない社会の建設

ガンジーの思想には、すべての者を排除しないという視点が一貫して見られる。

ガンジーは、社会の中で最も抑圧され弱い立場にある人々の存在を意識し、貧困からの解放を目指した。現代の日本社会では、新自由経済によって競争原理が強化され、障害者・高齢者などの社会的弱者の多くが切り捨てられている。実現までの道のりは困難を伴うかもしれないが、ガンジーの「すべてを排除しない」視点で社会を創っていくことが真剣に目指されなければならない。本来、社会的弱者が幸福と感じられる社会こそが、誰にとっても心地よい社会であるはずだからである。

### (2) 手仕事による自立

ガンジーは、大多数の人々が関われる産業として糸紡ぎに着目した。そこには幾つもの意味が含まれていた。すべての人が自治の主体となれるようにすること、それを労働によって行うこと、その労働は手仕事（チャルカでの糸紡ぎ・手機織り）であることなどである。

社会を創っていく主体が民衆であることは一般によく理解されているが、弱者も含めた人々が社会の担い手として労働に携わるというイメージは案外もちにくい。勿論、病気等により働きたくても働けない人々がいることは考慮すべきであるが、ガンジーが大多数の人々が関われる産業にこだわったのは、労働を通して弱者にも労働の喜びを感じて欲しかったからであろう。ガンジーが提唱したような手仕事ならそれぞれの体力に合わせた主体的な参加が可能であろう。労働が人間らしく生きていく基本であることを私達は再認識し、弱者を排除しない仕事や仕事の進め方を考えていく必要があるであろう。

ガンジーは、伝統的にインドの生活の中で使われてきたチャルカの復活を提唱した。それは、人々の生活と文化を切り離さないことが人間らしく生きる術でもあることをガンジーは見抜いていたからであろう。かつて私達の社

会では、生活と文化とが深く結びついていた。生活と農文化、生活と山村文化などである。伝統的な職人の生活もまたそうである。そして、それらは手仕事によって支えられていた。人間らしい暮らしを取り戻すために、こうした暮らしを回復していくことも不可欠であろう。

### （3）課題としての生命に鋭敏な身体

ガンジーは、チャルカに「質素、人類への奉仕、加害者にならずに生きること、金持ちと貧者・資本家と労働者・領主と小作人が揺るぎない絆で結ばれることなど」のメッセージを込めていた。そのメッセージを実現するためには、すべての生命を尊重する生き方が求められる。他者や自分自身、自然の尊重である。そうした方向へ向けて、生命に鋭敏な身体を養っていくことが課題となる。

そして、そのような身体を養うには、机上の学習ではなく、生命と丁寧に関わる体験そのものが必要となるであろう。手仕事を中心にした自給自足の生活体験、質素で共同的な生活体験など、他者や自然の生命と自分の生命とが交流できる体験は有意義であろう。

### おわりに

本稿では、現代社会に生きる私達が、人間らしい、より良い人生を送るためにどのような社会を築いていけるのかを考えるために、1冊の本を手掛かりにガンジーとの対話を試みた。現代社会に生きる一人としてその価値を身体に深く刻み込まれている筆者が、ガンジー思想の真髄を十分会得することはたやすいことではないにちがいない。しかし、今後も、ガンジーが勧める暮らし方、働き方を取り入れながら、著書を通じた対話をさらに重ねていきたい。

なお、ガンジーは教育についても論じている。ガンジーの教育論については、別の機会に検討したい。

## 注

- (1) M.K.ガンジー、田畑健編、片山佳代子訳『ガンジー・自立の思想—自分の手で紡ぐ未来』地湧社、1999年。本書には、編者による「まえがき」と「解説」が掲載されている。筆者は本書を読み進める上で、それらを参考にさせていただいた。
- (2) 同上、p.20
- (3) 同上、p.21
- (4) 同上、p.21
- (5) 同上、p.36
- (6) 同上、pp.98—99
- (7) 同上、pp.101—102
- (8) 同上、pp.143—144
- (9) 本書では、訳者が、アヒンサーの日本語訳に加えて、「ガンジーは敵をも愛することであるという広い意味で使っている」と付記している箇所がある。同上、p.78
- (10) 同上、p.161
- (11) 同上、p.121
- (12) 同上、p.68
- (13) 同上、p.67
- (14) 同上、p.67
- (15) 同上、p.123
- (16) 同上、p.116
- (17) 同上、p.115
- (18) 同上、p.139